

# 『新生』論

——発端としての藤村の思念について——

## 一

『新生』は、大正七年五月一日から十月五日まで、『東京朝日新聞』に第一部が連載され、翌大正八年一月一日、その第一部が『新生』第一巻として春陽堂から刊行された。その後第二部が、大正八年四月二十七日から十月二十三日まで『東京朝日新聞』に連載されて完結し、同年十二月二十八日『新生』第二巻として春陽堂から刊行された。『新生』は周知のように、作者藤村と、藤村の次兄広助の次女こま子との肉体関係と愛とを描いた作品である。姪との近親相姦をとりあげたということで、発表当初から問題作として論議の対象となった作品であった。

平野謙氏は、その衝撃の一例を次のように紹介している。

「節子は極く小さな声で、彼女が母になつたことを岸本に告げた」という一節をふくむ第十三章が突如（『東京朝日新聞』に――注）掲げられた日、田山花袋は非常に興奮しながら白石実三に語ったという、「君、島崎は自殺するかも知れない。……いや、かうしてゐるうちに、電報が来るかも知れない。困つた

## 橋 浦 史 一

ことになつた。……見舞ひに行くのも変だし、といつて、心配で遠くから傍観してゐるにしのびない」と。<sup>(1)</sup>  
これは、藤村の親友でもあった田山花袋の例であるが、しかし、平野氏は花袋と藤村の氣質の相違をも次のように指摘してみせている。

『蒲団』の作者と『新生』の作者との距たりを、ほとんど好人物とよんでもいい赧ら顔の田山花袋と「老獺」と後輩の作家から評されねばならなかつたような島崎藤村との氣質的相違を、このエピソードは如実にあらわしている。いかにも『新生』は決死の氣組みで書かれた。しかしその決意はどのような意味でも「自殺」を聯想さすものではなかつた。反対に、それはいかにかして生きぬきたい人間の執拗な動物力につらぬかれた決意にはかならなかつた。そこに『新生』一篇の持つ現実的な作因がある。<sup>(2)</sup>

明治四十三年八月、藤村の妻冬子は、四女柳子の出産の折の産後出血のため亡くなつてゐた。藤村はそのため、三男壽助を木曾福島

で、茨城県大津の西丸家の近くの漁農家に預け、長男楠雄と次男鶏二とを手元に置いて育てることにした。この年の夏、次兄広助の長女ひさが、女子職業学校を出て、家事手伝いのため藤村の下に来ることになった。そして翌明治四十四年の年末に、広助の次女こま子も家事手伝いに藤村の下へ来た。明治四十五年六月上旬、姉のひさはウラジオ領事館書記生田中文一郎に嫁いだ。次女のこま子は、家事手伝いとして藤村の下に残ったが、この頃から二人の間に關係が生じたいと推測されている。この当時の藤村の心境を反映していると思われる文章を、次にいくつか引用してみる。

左様だ、光と熱と夢の無い眠の願ひ、と言つた人もある。斯ういふ言葉を聞いて笑ふ人もあるだらうか。もしこれが唯の想像の美しい言ひ廻しでなく、實際斯の面白さうなことで満されて居る世の中に、光と、熱と、それから夢のない眠より外に願ひしいことも無いとしたら、奈様なものだろう。丁度私はそれに似た名状し難い心地で、二週間ばかり床の上に震へて居たことが有つた。(中略)『我等芸術の憐むべき労働者よ。普通の人々にはしかく簡単に自由を与へられるものも、我等には何故に容易に許されぬであらう。それも理である。普通の人々は真心を持つ。我等は遂に真心の何物をも持たぬ。我等は到底理解されざる人間である……』斯の言葉に籠る可傷しい真実を私は寝ながら思ひ続けた。(中略)蒸々とした空気の中で、墓守は汚れた額の汗を拭ひながら、(亡くなった三人の子供達の――注)三つの髑髏の泥を洗ひ落した。その中でも一番小さく日数の経つたのは頭や顔の骨の形も崩れ、齒も欠けて取れ、半ば土に化して居た。一番大きいのは骸骨としての感じも堅く、齒並も揃ひ、髪の毛までもいくらか残つて、まだ生々とした額の骨の辺

に土と一緒に附着して居た。それが私の子供等だ。すべてこれらの光景に対しても、私は涙一滴流れなかつた。唯、見つめたまゝで立つて居た。憐むべき觀察者。然り、我等は遂に真心の何物をも持たぬのであらう。(3)

静物の世界といふものがある。Still Lifeとは面白い言葉だ。もし私の空想を許すなら、斯世には静物の地獄もある。その地獄では、ダアキンも、ルウソウも、皿や林檎と何の異なるところが無い。(4)

人はいかなる物をも弄ぶやうに成る。(5)

いずれも中年に至つた作家藤村の、心の風景を記したものである。しかし又一方で、こうした思念を積極的な生への姿勢としてとらえ直して発言した文章に、次のようなものがあることにも触れておく必要があると思われる。

物を観るといふことに依つて、自己の革命を企て、新しい進路を開いて行つた人は少くない。不断の努力を続けた觀察者の生涯に対しては、吾儕はすくなからぬ尊敬の念を持つ。(中略)吾儕は、美しいことも、醜いことも、愚かしいことも、狂じみたことも、総てありのまゝに來て影を投ずる明るい鏡のやうな心を持ちたい。是は難いことだ。(中略)しかし物を観るといふことは各自一様では無い。(中略)そこで、斯の物を観るといふことが、それを押進めて行く人には、極めて特異な世間觀を抱かせるやうな場合も出來て来る。そこまで行くことが出來れば、則ち一生面を開いたものだ。(6)

真に人の自由な時とは、努めずして自由な時だ。オスカ・ワイルドの口吻をかりて言へば、自由を想像するに止まらずして、それを実現する時だ。<sup>(7)</sup>

Lifeをして趨くまゝに趨かしめよ。<sup>(8)</sup>

一方が、生のアンニュイ、虚無的な心境を示す文章とすれば、他方は、そうした心境を踏み台として、積極的な生、あるいは自由な生を生きようとする藤村の心境が託された文章といえるものである。そして、こうした二様の心境を踏まえて、作家としての藤村が対世間的な発言を試みたものに、次のような文章があるということを描けるように思われる。

芸術家が黙して他の非難を受ける場合は、人呼んで卑怯だとか臆病だとか言ふ。芸術家が黙して他の賞讃を受けても、誰も卑怯とも臆病とも言ふものが無い。<sup>(9)</sup>

大家とは何ぞや。世人は斯の称をみだりに芸術家に与へて置いて、いつでも後に成つて後悔して居るではないか。これは酷だ難有迷惑な話と言はねば成らぬ。よしんば人が吾儕を大家と呼んだからとて、吾儕自らまで大家と思はんければ成らんといふ法は無い。<sup>(10)</sup>

以上の文章は、凡て、藤村がフランスへ旅立つ前、すなわち「新生」事件の前後にわたって書かれた文章である。中年に至つた藤村の独身生活が「新生」事件を生んだのだという、単なる日常生活のレベルだけでこま子との関係をとらえるのではなく、以上のような藤村の思念を念頭において「新生」事件を考える視点を持つことが、実は重要な点ではないかと考えられるのである。

ところで、近親相姦の衝動と言へば、『新生』の前の作品『家』において、その予兆のような事柄が描かれていた。『家』下巻の三章に次のようにある。

夜の景色がよささうなので、三吉は前の晩と同じやうに歩きに出た。お俊も叔父に随いて行つた。(中略)草木も青白く煙るやうな夜であつた。お俊を連れて、養鶏所の横手から彼の好きな雑木林の道へ出た。月光を浴びながら、それを楽しんで歩いてると、何処で鳴くともなく幽かな虫の歌が聞えた。(中略)不思議な力は、不図、姪の手を執らせた。それを彼は奈何することも出来なかつた。『斯様な風にして歩いちや可笑しいだらうか』と彼が串談のやうに言ふと、お俊は何処までも頼りにするといふ風で、『叔父さんのことですもの』と平素の調子で答へた。斯の『斯様な風にして歩いちや可笑しいだらうか』が、彼を呆れさせた。(中略)深い静かな晩だ。さし入る月の光は、縁側のところへ腰かけた三吉の膝を照らした。お俊は、従姉妹のそばへ寝に行つたが、目がさえてしまつて眠られないと言つて、白い寝衣のままでもまた叔父のそばへ来た。(中略)『真実に――寝て了ふのは可憐いやうな晩ねえ。』と言つて、考へ沈んだ姪の側には、叔父が腰掛けて、犬の鳴声を聞いて居た。叔父は犬のやうに震へた。『まだ叔父さんは起きていらしつて？』とそのうちにお俊が尋ねた。『アゝ叔父さんに関はずサッサと休んどくれ。』と言はれて、お俊は従姉妹の方へ行つた。三吉は独りで自分の身体の戦慄を見て居た。(中略)『奈何したと言ふんだ――一体、俺は奈何したと言ふんだ。』と彼は自分自身に言つて見て、前の晩もお俊と一緒に歩いたことを悔いた。容易に三吉が精神の動揺は静まらなかつた。彼は井戸端へ出

て、冷い水の中へ手足を突浸したり、乾いた髪を湿したりして来た。(中略) 両国橋辺の混雑を思はせるやうな夕方が来た。

三吉は燈火も点けずに、薄暗い部屋の中に震へながら座つて居た。何となく可恐しいところへ引摺込まれて行くやうな、自分の位置を考へた。今のうちに踏留まらなければ成らない、と思つた。しばらく忘れて居た妻のことも彼の胸に浮んだ。次第に家の内は暗く成つた。遠く花火の上る音がした。

この時、「三吉」の身の「震へ」の対象となつた「お俊」は、『新生』の中の「節子」すなわち次兄広助の次女こま子ではなく、長兄秀雄の長女いさである。藤村はこの時、自分の血の中に流れる異常な衝動を自覚したろうし、又、「新生」事件の際には、さらにそうした事柄に対し、強い衝撃を自らの内に自覚したにちがいない。藤村は、小説『新生』の中にも近親の者に引かれる自分の性格についてのおびえを記している。しかし藤村は、そうした自らの理性によつては抑制の不可能な衝動によつてのみ動かされて、こま子との関係に落ちて行つたのだろうか。この点については考察の余地があると考えられる。

先に引用したいくつかの文章でもあきらかなように、藤村は、中年に至つて自分をおそつてきたアンニエーに対して大変自覚的であつた。妻がすでに亡くなつてゐることについても同様で、渡仏前に刊行された短篇小説集、『食後』にまとめられた小説群の中で、性の問題についてとりあげてゐるし、その短篇小説群を書いている最中であつて、「近頃は、わざとさうするのではないが、書く物／＼が色つぽいので、自分でも驚いてゐます。妻の在世の頃は、あゝ言ふ事を書くのは何だか厭であつたが」と、正確に自分の姿をかえりみている。「新生」事件は、無論、肉の衝動がなければ起らなかつ

たことは事実であるが、そうした事をうながす想念を起させる要件は他になかつたのかが問題とならう。

藤村は、『新生』第一巻百十三章で、フランスの地での「岸本」の父への回想を、意味深く描いてゐる。

岸本は父のことに就いて幼い時分の記憶しか有たなかつた。十四歳の今になつて、もう一度その人の方へ旅の心が帰つて行くといふことすら不思議のやうに思はれた。半生を通して繞りに繞つた憂鬱——言ふことも為すことも考へることも皆そこから起つて来て居るかのやうな、あの名のつけやうの無い、原因の無い憂鬱が早くも青年時代の始まる頃から自分の身にやつて来たことを話して、それを聞いて貰へると思ふ人も、父であつた。何故といふに、岸本の半生の悩ましかつたやうに、父もまた悩ましい生涯を送つた人であつたから。仮りに父が斯の世に生きながらへて居て、自分の子の遠い旅に上つて来た動機を知つたなら何と言ふだろう……けれども、岸本が最後に行つて地べたに額を埋めてなりとも心の苦痛を訴へたいと思ふ人は父であつた。

「岸本」すなわち藤村は、自分の身内の血のさわぎ、近親相姦の由来を、血のつながる父へと遡源させ、父と自己との一体化を試みようとしてゐる。藤村の、こうした自分の「罪」の理解者としての父への訴えの希求は、理由のないことではなかつた。後の作品『夜明け前』をはじめとして、他の作品の中にもその片鱗が描かれているように、藤村の父正樹は、癪の起つた時などは良く血のさわぎを覚えたという。又、異母妹由伎との間に肉体関係があつたことも伝えられている。こうした事実を背景に、藤村の父への帰郷の心情が描かれたわけであつた。単行本で削除された『新生』第一巻、『東

京朝日新聞』初出稿八十章には次のように記されている。

もとくゝ近い血族の異性に誘惑され易いやうな罪の深い性分に生れつたのではないかと聞かれるならば、彼はその声をすら否むことが出来なかつた。斯の罪の深い生れつきといふことを、彼はある意味での原始的な性質にまで持つて行つて考へて見た。あだかも社会的にも道德的にも開化した近代の人の種族の中に、未開な時代の野性をもつて生れて来るものも有り得るやうに。彼は血族の結婚が不倫ともされなかつた古代に、あるひは姪と、あるひは庶母と、あるひは庶妹と婚したといふ原始的な人達のことを想像し、その時代を想像し、高貴な人達から下賤なものに至るまで全く道德の標準を異にして居たことを想像し、その想像をあのこと記の中にある伊賀迦色許賣命、八田の若郎女、菟道若郎女、炊屋姫、輕太娘女のやうな貴婦人にまで持つて行つて見た。

父正樹の実生活上の事実を文脈として、こうした『新生』初出稿の叙述をとらえてみると、藤村がどのような想念の中でこま子との関係について想いをめぐらしていたかが明らかにになる。こうしたことは、言わば血族の中に見られる事実をとらえての想念の飛翔であるが、近親相姦の事実にかかわる世界は、この外にも藤村の身近にあった。

## 二

『新生』の前の長篇小説、『桜の実の熟する時』の執筆期間が、藤村の数え年四十二歳から四十七歳にかけての五年間であり、この期間は、『新生』事件と重り合う時期であつたこと、又、『桜の実の熟する時』の第十一章と第十二章とは、『新生』の『東京朝日新聞』

聞』初出稿と並行して筆が執られていることは周知の事柄である。その『桜の実の熟する時』の中に、バイロンへの言及がしばしば見られるのである。『桜の実の熟する時』第五章。

姦淫する勿れ、処女を侵す勿れ、嫂を盗む勿れ、其他一切の不徳はエホバの神の誡むるところである。バイロンの一生は到底神の嘉納するものとも思はれない。英吉利の詩人が以太利へ遊んだ時、ゼニス<sup>エニリス</sup>の町で年頃な娘をもつた家の母親はあ的美貌で放縱な人を見せまいとして窓を閉めたといふではないか。それにしても、万物を悲観するやうなバイロンの詩が奈何して斯う自分の心を魅するだらう。あの魅力は何だらう。假令彼の操行は牧師達の顔を洗めるほど汚れたものであるにせよ、あの芸術が美しくないとは奈何して言へよう。斯うまた考へない訳にいかなかつた。

同じ第五章。

もつとくゝ胸一ぱいに成るやうなものを欲しい。左様思つて見ると、堤を切つて溢れて行くやうな『チャイルド・ハロルド』の巡礼なぞの方に、捨吉は深く心を引かれるものを見つけた。

第八章。

何時の間にか捨吉は小父さんの店へ手伝ひに來た心を忘れた。一度読み出すと、なか／＼途中では止められなかつた。英訳ではあるが、(テヌの『英文学史』の一注)バイロンの章の終のところ、捨吉は会心の文字に遭遇した。『彼は詩を捨てた。詩も亦彼を捨てた。彼は以太利の方へ出掛けて行つた、そして死んだ。』と繰返して見た。

第十章。

青木と捨吉との交際はその日から始まつた。(中略)バイロン

の『マンフレッド』に胚胎したといふ青木が処女作の劇詩は、その煙草屋の二階で書いたものであることも分つて来た。

藤村は、『桜の実の熟する時』を、小説『春』の「序曲」と述べていた。その『春』の中にもバイロンの詩の引用がある。第二十八章に詩の原文の引用があり、蒲原有明の訳文が載っている。蒲原有明訳とそれ以下の部分を引用してみる。

『捲き返れ、深海の青海よりいざや捲け、／千万の軍艦きほふともあだなりや、／陸をしも人の手は覆へせーその力／この岸に劃られぬ、大和田の原の上を／破れの屑標ふぞ汝が功、こゝにして／人間の暴虐は影もなく、そが軀さえ、／束の間に滅えゆく雨の痕の一滴、／空像の命こそ汝が底にしづみゆけ、／鐘の音も棺も将や墓もなき秘密の淵に。』斯の歌を歌つて、青木は岸本と一緒に海の方へ行かうとした。行つて顔を洗はうと思つた。翌朝のことである。新鮮な屋外の空気が幾分か青木に蘇生るやうな心地を与へた。

この『春』の中に引用された詩は、バイロンの『チャイルド・ハロルドの遍歴』の中の「海洋」の一節である。小説『春』の、この引用部分の背景には、バイロンの文学を介しての「青木」と「岸本」、すなわち北村透谷と藤村との結びつきがうかがわれるわけである。『桜の実の熟する時』にも記されたように、透谷の劇詩『蓬萊曲』は、バイロンの『マンフレッド』に胚胎し、又、その前に創作されて、印刷はされたものの、作者自身にすぐ切りほぐされてしまった『楚囚之詩』も、バイロンの『シオンの囚人』の影響のもとに成った作品であった。その他透谷の評論中にもバイロンの名が見られ、藤村は、透谷の母子関係の不幸をバイロンの場合と重ね合わせて考えることもできるとさえ言っている。透谷の死後、彼の遺

稿の中から、藤村が発見した評論、『マンフレッド』及び『フォースト』の中に、透谷は、バイロンの生い立ちについて書いている。又、藤村が、透谷に深い関心を寄せるきっかけとなった評論、『厭世詩家と女性』の中にもバイロンの名が見える。こうして藤村の身近にバイロンの世界があったことは、容易に指摘できるのである。藤村のバイロンとの交渉は、特に若い頃の文学体験として、『春』や『桜の実の熟する時』の中に描かれたわけであるが、そうした作品の中に、バイロンの事を記す藤村は、近親相姦のおびえを自覚し、あるいはそのただ中にある藤村であった。小説『家』の中に描かれた「お俊事件」は、『山から持つて来た三吉の仕事』が上梓された年の夏の出来事<sup>(12)</sup>であるから、すなわち『破戒』の出版された明治三十九年の夏のこと<sup>(13)</sup>である。『春』を書く藤村は、「お俊事件」をすでに体験済みであったわけである。

以上のように、藤村及び透谷と、バイロンとの交渉は深いものがあるわけだが、一方、バイロンには近親相姦の事実があり、子供も一人もうけて、生涯相手の女性に対する情熱は失われなかった。この点についての阿部知二氏の解説を次に示してみる。

(バイロンは―注) 貴族の娘アナベラ・ミルバンク―バイロンにいわせれば『女流詩人、数学者、哲学者』であったという娘を、これも愛などによってではなく征服して、この場合には結婚をした。(中略) この結婚からは一人の女子も生れるが、三年ののちには別居が決定的となった。(中略) この冷たい結婚生活と並行して彼は他に情熱を燃やしていた。それは異母姉オリガスタ・リーを対象としたものであった。彼の父『ぎちがいジャック』が、彼の母と結婚する前にかかけおちしたカーマセン侯爵夫人に生ませた女性であり、幼少のころいろいろ会ったこと

がなく、いま出あってみると彼女は夫の乱行に苦しむ身であった。バイロンは、さほどの美しさも才気もない彼女に強くとらえられ、そのことが、やがて人々の目を引かずにはおかず、それがしだいに反バイロン感情を世につのらせる一つの強い原因となった。

又、バイロンの『マンフレッド』の中に登場する「アスターティ」には、異母姉オーガスタが擬されているし、バイロンの詩の中に、「オーガスタに寄す」と題する詩も見られるのである。こうして、「お俊事件」、透谷の面影を描くと共にバイロンの詩をとりあげた『春』の執筆、「お俊事件」を書いた『家』の執筆、こま子との肉体的関係、バイロンをとりあげた『桜の実の熟する時』の執筆、そして『新生』の執筆と順を追ってたどってみると、そこに近親相姦にかかわる一筋の糸がたどれることになる。

『新生』の中に、フランスの地にあつて、「岸本」が父への回帰を志向する場面があることは前に述べた。それは、「岸本」の運命を考える上で深い示唆を与える事柄であつたわけだが、フランスの地での先行きの見通しも分らないような生活の中で、「岸本」に心の転機が訪れ、「岸本」が帰国の決意を固めるもう一つの重要な場面が『新生』にはある。『新生』第一巻百二十八章から百二十九章にかけてであるが、次にその場面を引用してみる。

其晩、岸本は遅く部屋の寝台に上つた。枕に就く前にも、床の上に半ば身を起こして居て、若い時分の友達のことや、自分の青春時代のことを思ひ出した。あの早くこの世を去つた青木に別れた時から数へると、やがて二十年近くも余計に生き延びた自分の生涯を胸に浮べて見た。彼は唯持つて生れたまゝの幼い心でその日まで動いて来たと考へて居た。気がついて見ると、

どうやらその心も失われかけて居た。『左様だ。何よりも先づ自分は幼い心に立ち帰らねば成らない』と言つて見た。旅に来てその晩ほど、彼は自分の若かつた日の心持に帰つて行つたことは無かつた。頑な岸本の心にも漸くある転機が萌した。(中略) 漸く彼には帰国の決心がついた。

自分の青年時代のこと、特に「青木」への想いが、「幼い心」を導き出して帰国の決意がなされるわけである。藤村はこの時、フランスの地にあつて、書きかけの『桜の実の熟する時』の世界を想起していたとも考えられる。その時の、自分をさいなむ「節子」(こま子―注)との肉体的関係と、「青木」(透谷―注)への回帰、この二つの項目を最もよく結びつける事柄は、『桜の実の熟する時』にも再三とりあげられたバイロンの生涯ではなかつたか。こうして、父の生涯への想念と共に、バイロンへの思いが、「新生」事件を支える藤村の思念として働いたのではないかということが考えられるのである。

藤村は、フランスに旅立つ前年の大正元年十一月、父正樹の頌徳碑が馬籠に建立された記念に、正樹の遺稿集『松か枝』を出版して父の声に親しく触れることになった。又、フランスに旅立つ年の大正二年一月、『桜の実の熟する時』の改稿前の小説、「桜の実」を発表している。いずれも、こま子との関係が始まつた後のことである。

こうして藤村の想念の中に、父への思いと、青年時代、透谷達との交友の中で親しんだバイロンへの思念が、すでに「新生」事件を支える藤村の思いとして想起されていたことも推測するに難くない。しかし小説『新生』の中に見る限りではそうした事実とはとりあげられておらず、『桜の実の熟する時』の中に記されたバイロンへ

の論及などは、むしろこま子との関係を救済するという方向での心の支えとして考えられている節もあるかに見えるのである。しかし実生活の地平で考えた場合、『マンフレッド』に示された「アスターティ」、あるいはバイロンの生涯などを索引として、藤村がこま子と関係を結ぶ想いをつむいだという考え方は、依然として可能ではないかと思われる。『新生』序の章には、「青木」を含めて、『春』や『桜の実の熟する時』でとりあげられた若き日の友人達が登場する。そこにバイロンへの想いが隠されていることも考えられるのである。藤村の『新生』が、全くの事実の告白だけによった作品と見る立場からは、こうした説は成り立ちにくい。藤村の自伝的小説が、事実の削除や改変が行われて成立していることを知っている者には、こうした考え方は受け入れられるのではないかと思われるのである。

### 三

ところで、平野謙氏は、『新生』の中に見られる「嵐」という語に注目して、次のように指摘している。<sup>(14)</sup>

「嵐は到頭やつて来た」「悲しい嵐の記憶」「三年前の嵐の烈しさ」「漸くのことその港まで落ちのびることの出来た嵐の烈しさ」「斯の旅を思立たない前に恐ろしい嵐の身に迫つて来た頃の心持」というような表現が『新生』のいたるところにみられるが、作者はその烈しかった「嵐」の中味については一言半句ふれようとしない。説明ぬきの「嵐」という言葉だけで強引に最後まで押し切っている。読者はこの「嵐」の内容を「極く小さな声で、彼女が母になつたことを岸本に告げた」節子の言葉からわずかに推測するにすぎない。

藤村が『新生』の執筆を始めるのは、瀬沼茂樹氏や和田謹吾氏の推定に従えば、大正七年四月五日前後となっている。ここで、平野氏の「嵐」の語の指摘にかかわる事実と関係すると思われる事柄を、和田謹吾氏の指摘によって示してみると、大正七年一月号の『中央公論』に、中沢臨川が、「嵐の前」という処女小説を発表している。中沢臨川は、この頃藤村と親しい交際があり、小説『家』の序文を藤村に求められた間柄でもあった。そして『新生』第一巻二十七章には、次のような場面がある。

『岸本君。』と元園町は酔に乗じて岸本を励ますやうに言った。  
『君も一度欧羅巴を見ていらつしやい……是非見ていらつしやい……もし君が奮発して出掛けられるやうなら、僕はどんなにでも骨を折ります……一度は欧羅巴といふものを見て置く必要がありますよ……』岸本は黙し勝ちに、友人の話を聞いて居た。どうかして生きたいと思ふ彼の心は、情愛の籠つた友人の言葉から引出されて行つた。

「元園町」とは、中沢臨川のことである。和田氏は、「捨吉のフランス脱出は、へどうかして生きたい」手段として「考えられ、」「元園町の友人のことばにヒントを得て、その日、家に帰ると節子にへ好い事がある。まあ明日話して聞かせろ」(一ノ二八)という発言になって行く。へ酒の上で言つたやうなことを、左様岸本君のやうに真面目に取られても困る(一ノ三〇)と元園町の友人が言うくらい、捨吉の決意は周囲の人には唐突に即決した。と、『新生』の中の言葉を引用しながら指摘している。<sup>(15)</sup>又、臨川と藤村との間には、藤村のフランス行きに当って、「へ私を励まして五百円ほどの補助をして呉れるとの堅い約束」(大正三・六・一七、神津猛宛書簡)があったのである。臨川は、小説「嵐の前」の執筆に「大正六年



十月初めから」とりかかり、「二月上旬に完成」している。藤村と臨川との関係からすれば、臨川の「〈多少得意〉」の作はすでにその段階で話題になっている可能性もあり、また臨川の処女作であればそれが掲載になった大正七年一月号の『中央公論』は発売の前年一月中旬にかならず藤村は読んでいるはずである。」という推測も成り立つ。そして、その処女小説の発表の時期が、「藤村の『新生』執筆決意の時期」に重なっていることは、「藤村のフランス脱出が臨川の示唆によったことと考え合わせて注意を引く点である。」と和田氏は指摘する。

ところで「嵐の前」は、どういう内容の作品であったかであるが、それは、ニーチェを題材にとり上げて書かれたものであった。

「嵐の前」は、「ニーチェがやがて四〇の坂にかかろうとする一八八一年、『曙光』出版の直後」から筆が起されている。そして「その書のことを臨川は作中で〈半生の病苦と懊悩とに別れて新らしい生涯に入るめでたい記念〉と呼んだと和田氏は指摘し、そして次のように述べる。

(エンガデンの地はニイチェにとって―注) へちやうど二年前に、彼が全き絶望の心を抱いて、死を覚悟しながら、重い傷を負った獣の深林に遁れるやうに、遺瀕ない孤独を<sup>もと</sup>覓めに来た。土地である。だが〈不思議にもその地の空気は彼を活かした。暫く滞在してゐるうちに彼の病氣は一皮々と剝ぐやうに薄らいでいった。〉(中略)そして〈自分が今迄生き苦んで来た寒い灰色の禁欲主義や努力主義を嫌〉い、〈世の中の快樂に対しても寛大な心を持ち始めた。〉彼は、思索生活と耕農生活との調和ある田園のなかにもつ家庭を空想し、〈その静かな農園でまめまめしく彼を慰めてくれる若い温順な女性〉を想像してみ

て、それが〈妹のリスベスに対する非常な罪悪であるやうに思はれた。彼の身の上を案じて未だに独身である妹に〉。そういうところへ、ニーチェが日頃尊敬するメーセンブグ女史から便りが来て、その紹介でルイ・サロメという女性に会うためにニイチェはローマへ行くことになる。(中略)ローマでサロメに会ったニイチェのころはたちまち彼女のとりこになるが、〈自分は一生結婚しないといふことを、これ迄彼は妹のリスベスに誓ったことを思い出して哀愁に襲われる。ニイチェはやがてサロメに求婚するが〈どうぞあなたと私の間だけは潔い友情で一生を貫かして載きたう御座います〉と言って身をかかわれる。ニイチェはドイツに帰り、〈本然の人生が無意義ならば、自分はそれに一つの意義を与へよう、自ら生きがひのある人生を造らう〉と決心する。〈汝は汝の敵を求めねばならぬ、汝は汝の戦を戦はねばならぬ、汝は汝の思想に向つて戦はねばならぬ。〉そう考えたとき、〈大きな戦の野がニイチェの前に開けた。〉〈彼は悲壮な「驗者」としての新らしい道に進んだ。〉そこでこの「嵐の前」は終っている。

和田氏はこう述べて、「この一編に臨川が描いたニイチェの思想、あるいはリスベスの存在などは、いろいろの意味で『新生』に通ずるものを感じさせる。そういう作品が、『新生』発想の段階で、中沢臨川によって、「嵐の前」という題で発表されていたことは注目し得る。〈新生〉事件の最中において藤村の精神を支えたものはおそらくニイチェだったからである。」と言ひ、藤村の「新生」事件とニイチェの思想との関係を丁寧に説いてみせてくれている。

ところで、ここで問題にしたいのは、「新生」事件が起った当時の藤村とニイチェとの関係である。その頃書かれた短篇小説「出

発」に「心を起さうと思へば、先づ身を起せ」というニーチェの言葉が記されていることは和田氏も指摘している。

ニーチェ主義が、日本において、文壇をはじめとして広く喧伝されたのは、明治三十四年、藤村の小諸時代、なかでも藤村の「沈黙三年」と言われる時代で、「雲」や「千曲川のスケッチ」をはじめとする「写生」の「スタディ」に力をいれていた時期であった。そして、明治三十六年十一月、藤村は、「ニーチェ文集」を読了している。しかし、ここでは「新生」事件の起る前の年、明治四十四年一月に、有名な生田長江訳のニーチェ「ツァラトゥストラ」が刊行されていることに注目したい。この年の六月、藤村は、『中学世界』に、小諸で書かれた初稿「千曲川のスケッチ」に手を入れて、「千曲川のスケッチ」を連載しはじめる。『家』の下巻「犠牲」が、『中央公論』に発表されたのは、この年の一月から四月にかけてである。藤村は、大正十五年八月、談話「『春』のことがら」<sup>(19)</sup>で、

私は、『破戒』を書いてゐるうちに、この『春』を書かうと思ひ付きまして、『春』の中にある人物を、一つのグループとして、或は、群像として、胸に描いてみるやうになつたのです。それから『春』を書いてゐるうちにまた今度は『家』を書かうといふ意匠が、あとから芽ぐんで来ました。ところが『家』を書いている間に、今度は、その次ぎの長篇といふものが、胸に芽ぐんでこなくなつてしまつた。——あの時は、自分でも心に寂しく思ひました。

と、述べている。後、藤村は、「三つの長篇を書いた当時のこと」に、同様のことを述べている。この時藤村は、次の長篇小説が心に浮かんでこなくなつた段階で、小説家として出発した小諸時代のことを再び想ひかえていたのではなかったか。『家』下巻の「犠牲」

発表後、藤村は、短篇小説を書きはじめるが、その短篇小説群は性の問題が主なテーマであり、モーパッサンに学んだ世界に通ずるものであった。それらの小説群をまとめた短篇小説集『食後』の題名は、モーパッサンの「After Dinner Series」に由来すると言われている。<sup>(21)</sup> 藤村が、モーパッサンの大きな影響の下で短篇小説を書き、作家としての修業をつんだのは小諸時代であり、それらの短篇小説群の主なテーマは性の問題であった。

こうして見ると、「千曲川のスケッチ」、ニーチェ、モーパッサン、性の問題と、藤村のこの時期の関心のありどころが、小諸時代と重なるのである。おそらく藤村は、『家』下巻「犠牲」を書き上げて、次の長篇小説が浮かんでこなくなつた時に、新生面を開きたい心から、修業時代としての小諸時代を想起していたにちがいない。付け加えれば、短篇小説集『食後』の序文として用いられた蒲原有明の藤村宛書簡は、『新生』序の章の冒頭に引用された。このことは、『食後』の短篇小説群の中でとりあげられた性の問題が、『新生』へとつながる内実を持ったものであったことを示唆してはいないかという点も問題である。しかしこの時に、藤村が小諸時代と異なつていた点は、妻が亡くなつてゐるということであつた。そして藤村は、短篇小説集『食後』が刊行された直後から、自分の幼少年期をとりあげた、「ある婦人に与ふる手紙」を、『婦人画報』に連載しはじめることになる。これは中途から「幼き日」と改題されて、藤村の渡仏のため筆が置かれるまで書きつがれた。この幼少年期への関心は、藤村の偶然に選んだ題材であつたのだろうか。「ある婦人に与ふる手紙」は、明治四十五年五月一日からの連載であるが、こま子との関係が始まつたのは、六月上旬頃とされている。この「幼き日」への関心は、偶然の選択ではなく、藤村のニー

チエへの関心から発したものでなかっただろうか。生田長江訳の『ツアラトゥストラ』が、前年に刊行になっていたことはすでに触れたが、その『ツアラトゥストラ』の思想が、藤村の「性のかわき」と結びついて、こま子との関係に進むことになったのではなかったかと推察されるのである。

## 四

『ツアラトゥストラはこう言った』<sup>(22)</sup>は、「ツアラトゥストラの序説」の後の、「ツアラトゥストラの教説」の最初に、「三段の変化」の章が置かれている。『ツアラトゥストラはこう言った』の「三段の変化」の章からの引用を次に示してみたい。

わたしはあなたがたに、精神の三段の変化について語ろう。どのようにして精神が駱駝となるのか、駱駝が獅子となるのか、そして最後に獅子が幼な子になるのか、ということ。——精神にとって多くの重いものがある。畏敬の念をそなえた、たくましく、辛抱づよい精神にとっては、多くの重いものがある。(中略) こうしたすべてのきわめて重く苦しいものを、忍耐づよい精神はその身に引き上げる。荷物を背負って砂漠へいそいで行く。駱駝のように、精神はかれの砂漠へといそいで行く。しかし、もっとも荒涼たる砂漠のなかで第二の変化がおこる。ここで精神は獅子となる。精神は自由をわがものにして、おのれの求めた砂漠における支配者になろうとする。精神はここで、かれを最後まで支配した者を探す。精神はかれの最後の支配者、かれの神を相手取り、この巨大な竜と勝利を賭けてたたかおうとする。精神がもはや主なる神と呼ぼうとしないこの巨大な竜とは、なにものであろうか？ この巨大な竜の名は「汝なすべ

し」である。だが獅子の精神は「われは欲する」と言う。(中略) 新しい価値を創造する、——それは獅子にもやはりできない。しかし新しい創造のための自由を手にいれること——これは獅子の力でなければできない。(中略) しかし、わが兄弟たちよ、答えてごらん。獅子でさえできないことが、どうして幼な子にできるのだろうか？ どうして奪取する獅子が、さらに幼な子にならなければならないのだろうか？ 幼な子は無垢である。忘却である。そしてひとつの新しいはじまりである。ひとつの遊戲である。ひとつの自力で回転する車輪。ひとつの運動。ひとつの聖なる肯定である。そうだ、創造の遊戲のためには、わが兄弟たちよ、聖なる肯定が必要なのだ。ここに精神は自分の意志を意志する。世界を失っていた者は自分の世界を獲得する。わたしはあなたがたに精神の三段の変化を教えた。どのようにして精神が駱駝となったか、駱駝が獅子となり、そして最後に獅子が幼な子になるかということだ。

こうして、『ツアラトゥストラはこう言った』の「三段の変化」の章が終わり、次に「徳の講壇」の章が来て、世にいう「徳の説教者」が否定され、次に「世界の背後を説く者」の章が来る。その章は次のように結ばれる。

これらの神に似通った人々をわたしはあまりにもよく知っている。かれらは、自分たちが信じられたいと思ひ、懷疑は罪だと思ひたい。わたしはまたあまりにもよく知っている。かれら自身、何をいちばんよく信じているかを。たしかに、世界の背後や救済のために流す血ではない。むしろ、かれらもまた身体をいちばんよく信じているのだ。(中略) しかしその身体が、かれらの場合、病んでいるのだ。そのためかれらは、いたたま

なくなってくる。そこでかれらは死の説教者に耳を傾けたり、みずからも世界の背後を説いたりするのだ。わが兄弟たちよ、むしろ健康な身体の話に聞くがいい。これはもっと誠実な、もっと純粋な声である。健康な身体、完全な、しっかりした身体は、もっと誠実に、もっと純粋に語る。それは大地の意義について語るのだ。

そして、この次に「身体の軽蔑者」の章が来る。以上のような過程を経て、「三段の変化」の章から「身体の軽蔑者」の章へと進んでみたいのである。「身体の軽蔑者」の章には次のようにある。

「わたしは身体であり魂である」——これが幼な子の声だ。なぜ、ひとは幼な子のように語ってはいけないのか？ さらに目ざめた者、識者は言う。わたしはどこまでも身体であり、それ以外の何物でもない。そして魂とは、たんに身体における何物かをあらわす言葉にすぎない。身体はひとつの大きな理性だ。ひとつの意味をもった複雑である。(中略) あなたが「精神」と呼んでいるあなたの小さな理性も、あなたの身体の道具なのだ。(中略) 「わたし」とあなたは言い、この言葉を誇りとしている。しかし、もっと大きなものは、——それをあなたは信じようとしなが—あなたの身体であり、その大きな理性である。それは「わたし」と言わないで、「わたし」においてはたらいっている。(中略) 感覚も精神も、道具であり、玩具なのだ。それらの背後にはなお本物の「おのれ」がある。この本物の「おのれ」が、感覚の眼をもつてたずねている。精神の耳をもつて聞いているのである。(中略) わが兄弟よ、あなたの思想と感情の背後には、強力な支配者、知られざる賢者がひかえている、——それが本物の「おのれ」というものなのだ。(中略)

あなたの最善の知恵のなかよりも、あなたの身体の中に、より多くの理性があるのだ。(中略) 本物の「おのれ」は「わたし」に言う。「ここで苦痛を感じなさい！」すると「わたし」は苦しみ、どうしたら苦しまないで済むかと考える、——まさにこのために、それは考えなければならなくなる。本物の「おのれ」は「わたし」に言う。「ここでよろこびを感じなさい！」すると「わたし」はよろこび、どうしたらさらに何度もよろこぶことができるかと考える、——まさにこのためにこそ、それは考えなければならなくなる。

「三段の変化」の章において、「創造の遊戯のためには」「三段の変化」が必要であり、終局において「幼な子」にならなければならぬことが説かれ、「身体の軽蔑者」の章において、「『わたしは身体であり魂である』——これが幼な子の声だ」と述べられて、「身体」こそ「本物の『おのれ』」だと説かれ、「感覚も精神も」その「道具」にすぎないと語られた。こうして藤村の身体に流れる「血のさわぎ」が、彼の精神を従えることになる、思想的許容の姿勢が形成されたのではなかったか。中沢臨川の「嵐の前」は、「ニーチェがやがて四〇の坂にかかろうとする一八八一年、『曙光』出版の直後から書き起こしている」わけであった。そしてニーチェは、ルー・サロメに会い、求婚するが、友人として終わりたいとの返事をサロメから受けとる。そしてニーチェはドイツに帰り、「大きな戦いの野がニイチエの前に開けた。／＼彼は悲壯な「驗者」としての新らしい道に進んだ。」(23)そこでこの『嵐の前』は終っている。わけであった。ニーチェの伝記的事実に従えば、「ニーチェがサロメ嬢に始めて会ったのは、一八八二年春のことである。一八八二年と言えば『ツァラトゥストラ』成立の前年であって、ニーチェは既にこの時永却帰帰の

根本思想を受胎していた。しかしそれは実際はまだ『思想』と言えるほどの、はっきりした形をとっておらず、彼はもう少し何か科学的な裏付けといったものも欲しいと思っていたのである。サロメ嬢と相識るに至った時点は、ちょうどそういう時であった。」と、秋山英夫氏は説明している。従って、「大きな戦の野がニイチェの前に開けた。へ彼は悲壮な『驗者』としての新しい道に進んだ。」と言うのは『ツァラトゥストラ』執筆の事実を指しているはずである。臨川の小説がとりあげた、サロメとの出会いの時期が、「嵐の前」であるならば、「嵐」は、『ツァラトゥストラ』の成立にかかわる事実を指すことになるはずである。

藤村は、『新生』序の章、第五章の終わりに、

岸本の四十二といふ歳も間近に迫つて来て居た。前途の不安は、世に男の大厄といふやうな言葉にさへ耳を傾けさせた。彼は中野の友人に自分を比べて、斯様な風に言つて見たこともある。友人のは生々とした寛いだ沈黙で、自分のは死んだ沈黙である。その死んだ沈黙で、彼は自分の身に襲ひ迫つて来るやうな強い嵐を待受けた。

と、記した。そして第一巻の第十五章の冒頭に、「嵐は到頭やつて来た。」と記されるわけである。平野謙氏は、「嵐」という言葉をもなった表現が「『新生』のいたるところにみられるが、作者はその烈しかった『嵐』の中味については一言半句ふれようとしなない。説明ぬきの『嵐』という言葉だけで強引に最後まで押し切っている。読者はこの『嵐』の内容を『極く小さな声で、彼女が母になつたことを岸本に告げた』節子の言葉からわずかに推測するにすぎない。」と指摘したわけであった。この「嵐」の言葉が、大正七年一月発表の、中沢臨川の「嵐の前」の表現を受けて書かれた、『新生』

という小説の中での単なる表現上の問題として受けとるという観点もあるわけだが、しかしそれならなぜ藤村が、ニイチェをとり上げた「嵐の前」にこだわったかが全く分らなくなる。

藤村は、「言葉は思想である、行ひである。又符牒である。」と述べたが、藤村には言わずして主張したい事柄があったに相違ないと思われる。亀井勝一郎氏は、「フランス旅行を決めた日に、岸本は節子に向つて、『好い事がある。まあ明日話して聞かせる。』と、たゞそれだけを告げる。(中略)この辺の描写は甚だ唐突で、節子が多きな反応を示したか、殆んど伏せられてある。何か大切なことを省略したのではないかと疑はれるのだ。(中略)彼は何を隠したのか、省略したのか。といふよりは、現はさうと思つても現はしえなかつたものがあつたのか。これは藤村の創作方法の根本にもふれる問題である。」と指摘している。(26)又、一方藤村は、『新生』第二巻の七十二章に、

岸本が浅草時代の終にあたる自分の生活をデカダンの生活として考へるやうに成つたのも、あたかもその生活の中に咲いた罪の華のやうに節子を考へるやうに成つたのも、それは彼が遠い旅に出てからずっと後のことであつた。

と、記した。「岸本」は、渡仏前、「節子」との関係を、「デカダンの生活」から落ちいった「陥穽」とは思つていなかったことが了解されるのである。そして藤村は、そうした渡仏前の「節子」との関係についてかわりのある具体的事柄は凡て削除し、第一巻の十章に、「節子は極く小さな声で、彼女が母になつたことを岸本に告げた。」と、突然「節子」の妊娠の事実を持ちだした。藤村は自分の想念、すなわち、ニイチェの『ツァラトゥストラ』、その他、先に示した思念によって動かされた自己の姿と、そうした思念の下で

の「節子」との肉体関係の様相をたくみに削除しながら、「嵐」という一語によって、それを象徴して見せたのではなかったか。「嵐」という藤村の一語は、事柄の隠蔽を象徴する言葉であると同時に、事実の開示の手がかりとなる象徴的な言葉であったと考えられるのである。藤村が書く事をさけた理由は、世俗との妥協にあったとも見られるのである。

『新生』において、「節子」の妊娠を告げる場面で、近親相姦の事実が初めて明かされる「新生」事件の発端にかかわる藤村の思念の世界を追い、こま子との関係へと進む、藤村の思念の成り行きの必然性について考察してみた。しかし、『新生』第一巻冒頭に記されたような生活の中での、以上のような藤村の思念は、後に藤村自身によって、『新生』第二巻の七十二章で述べられたように、振り返ってみれば、そうしたこま子との関係にかかわる認識は、デカダンスの外の何ものでもなかったと考えられるに至ったようである。そうした点を受けて、『新生』第二巻では、「岸本」と「節子」の救済への志向が語られることになる。『新生』第一巻、百二十八章に描かれた「幼い心」は、「岸本」と「節子」の、それぞれの結婚を前提とした救済への志向を暗示する言葉として、とらえなおされたものであるとすることができようであらう。

## 注

- (1) 平野謙著『島崎藤村—人と文学—』。
- (2) (1)に同じ。
- (3) 「日光」(『中央公論』明治四十五年四月)。
- (4) 「静物の世界」(感想集『後の新片町より』所収)。
- (5) 「人」(同右)。

- (6) 「観ることを書くこと」(同右)。
- (7) 「自由」(同右)。
- (8) 「Life」(同右)。
- (9) 「芸術家」(同右)。
- (10) 「大家」(同右)。
- (11) 「古きを温める心」(『早稲田文学』明治四十四年九月号)。
- (12) (1)に同じ。
- (13) 阿部知二訳『バイロン詩集』(『世界詩人全集』2)。
- (14) (1)に同じ。
- (15) 和田謹吾著『島崎藤村』。
- (16) (15)に同じ。
- (17) (15)に同じ。
- (18) (15)に同じ。
- (19) 『文章倶楽部』大正十五年八月号。
- (20) 感想集『市井にありて』所収。
- (21) 瀬沼茂樹著『近代日本の文学—西洋文学の影響—』。
- (22) 氷上英廣訳『ツァラトゥストラはこう言った』。
- (23) (15)に同じ。
- (24) 秋山英夫著『人間ニーチェ』。
- (25) 「言葉」(感想集『新片町より』所収)。
- (26) 亀井勝一郎著『島崎藤村論』。